

日本の名字を探る

日本には実に多くの名字がある。政府による公式の調査がないため推定にすぎないが、その数はおよそ15万。移民で成り立っているため、世界中から人が集まっている米国を別にすれば、世界でも有数の名字の種類が多い国である。

名字とは、本来、家と家を区別するものであることは世界中どこでも同じ。ではどうやって家と家を区別するかといえば、住んでいる場所か、その家の職業で区別するのが手っ取り早い。英語圏で一番多い「Smith」という名字を大型の英和辞典で引いてみると「鍛冶屋」という言葉が載っている。スミスさんとは、鍛冶屋さんのことなのだ。

では日本ではどうかというと、地名を由来としたものが多い。近年の市町村合併でできた合成地名や、ひらがなの市名などは別にして、昔からある地名は名字と共通するものが多い。

試みに、『中学校社会科地図』の中部地方(p.91~92)を開いてみよう。この2ページに記されている地名で、名字と共通するものにはどんなものがあるだろうか。東御(長野県)、南アルプス・北杜(山梨県)、伊豆の国(静岡県)、愛西(愛知県)のような合併地名を別にすれば、富山・高岡(富山県)、金沢・小松・加賀(石川県)、大月(山梨県)、長野・松本・上田・飯田(長野県)、高山・関・土岐(岐阜県)、三島・島田・伊東・下田(静岡県)、岡崎・豊田・西尾(愛知県)といったおもな都市名は、名字と共通しているものが多い。小さな地名まで入れれば、実にたくさんの地名が名字と共通している。

もちろん、これらの地名がすべてその名字のルーツであるというわけではない。日本には同じ地名はたくさんある。従って、たまたま一番有名な地名がその名字のルーツとは限らない。

92ページ右下、伊豆半島の東側に「伊東」という市がある。ここは、全国に多い「伊東」さんのルーツの地である。平安時代の終わり頃、藤原氏の一族がこの地に住んで、「伊東」を名字としたのが始まり。以来、伊東一族は全国に広がっていった。

中部地方は、名字のルーツの地が多い地域。静岡県の松崎(p.92-F7)、岡部・相良(p.92-E7)、愛知県の吉良(p.92-c7)、岐阜県の土岐(p.92-c6)などは、それぞれの名字のルーツの場所だ。この他にも、岐阜県の明智(p.92-c6)は明智光秀の、長野県の真田(p.91-e4)は真田一族のルーツである。これ以外にも、浅野(岐阜県)、松平・細川(愛知県)、井伊(静岡県)などのルーツも中部地方にあるが、残念ながらこの地図帳に掲載されていない。

名字のルーツとなった地名は 戦国時代以前のもの

しかし、メジャーな名字のルーツが、必ずしも大きな町の名前ではないのはなぜだろうか。

その理由は、現在の名字の大多数ができたのが、平安時代後期~戦国時代にかけてだからだ。この時代、各地で新しい土地が開墾された。開発者はその土地が自分のものであることを明確にするために、土地の地名を名字として名乗った。とくに、家を継ぐことのできない二男以下は積極的に近隣の土地の開発者となった。その

ため、親と子で名字が違うということは別に珍しくはなかった。これが、現在のように地名を由来とする名字が増えた最大の理由である。彼らは武力を持ち、命がけて自分の土地を守った。

江戸時代になると、全国津々浦々までしっかりと管理され、勝手に土地を切り開いて私有することはできなくなる。また、「家」という制度が確立し、親子で違う名字を名乗るということはいはなくなり、名字がだんだん固定化されていった。

つまり、名字のルーツとなった地名は、最近の地名ではなく、戦国時代以前の地名が主流なのだ。現在の都市は、江戸時代に城下町になったことで発展した町や、明治以降に急速に栄えたところも多い。こうした地名はどんなに大都市であろうと、名字のルーツとはなりえない。

この典型的な例が北海道である。北海道の地図(p.111~112)を開き、ここに掲載されている地名で、名字と共通しているものを探してみよう。福島(p.111-b5)や池田(p.112-e4)、伊達(p.111-b4)といった地名はみつかるが、中部地方とはくらべて非常に少ないことがわかる。札幌・函館・室蘭・小樽・釧路といった有名な都市は名字にはみられない。その理由は北海道の歴史をひもといてみるとわかる。

北海道は、江戸以前は“蝦夷”と呼ばれ、渡島半島南部を除いては、日本人(和人)は住んでいなかった。現在の北海道の地名は、アイヌ語の地名に漢字をあてたり、本土からの移住者が出身地の地名をつけたりしたものがほとんどで、名字がさかんにつくられた時代にあったものではない。

消滅した地名

また、地名は時代とともに消滅してしまうものもある。たとえば、87ページの①「大阪市中心部」②「元禄時代の大阪」の地図で、堂島・中之島とかかれたあたりのことを、かつては「渡辺」と呼んでいた。平安時代にはこのあたり近くまで海が入り込んでおり、「渡辺」という

地名はこの付近一帯の広い地域をさしていた。この場所に嵯峨天皇の子孫が住んで、「渡辺」を名乗ったのが、渡辺姓の始まり。「渡辺」姓は現在では全国で5番目に多い名字だが、そのルーツの地は今では消滅し、堂島川にかかる渡辺橋という橋に残っている程度なのだ。

こうして、住んだ場所を名乗ることによって生まれた名字だが、現在では変更することは原則としてできない。今横浜に住んでいるから、とって「横浜」さんに改姓することは不可能だ。明治の初めに戸籍制度ができたことによって、日本人の名字は完全に固定化された(奇異な名字から一般的な名字への変更のみ可能)。現在の名字がこの時に確定したわけだが、この時に大多数の人が適当に名字をつけたと思っている人が多い。だが、これは国民的な大誤解である。

武士のみが名字があった…わけではない

こうした誤解の生まれた最大の理由は、江戸時代は武士のみが名字帯刀を許されたと習うからであろう。もちろん、このことは事実であり、なんら間違っていない。しかし、重要なのは「許された」という点なのだ。武士のみが名字を名乗ることを許され、公式の場所や公文書上で名乗ることができた。それ以外の人たちは許されていないため、公式の場所では名乗れないし、公文書にも掲載されることはない。公文書に記されていないことはすべてなかったというのでは、庶民の歴史などなかったことになってしまう。

実際、群馬県高崎市で、江戸時代に建てられた町人の墓石を調べたところ、すべてに名字が記載されていたことが報告されている。

つまり、武士の子孫であるかどうかは関係なく、現在の日本人の名字の大多数は江戸時代以前から存在していた。そして、その多くは各地の地名にルーツがある。地図帳を広げて、自分の名字と同じ地名を発見したら、そこはひょっとしたら、先祖が住んだルーツの地であるかもしれない。